



特273

44

始



富士と帝劇

「時しらぬ山の富士の峰、いつとても鹿の子まだらに雪の降るらん」といふ古歌があります。それは富岳の山巔が常に皚々たる白雪を戴き、よく四時の外に超脱し得てゐるを詠じたものであります。その富岳の如くに、我が帝國劇場も亦、四時の外に超脱して居りまして、場内には曾て夏來らず、冬至らず、唯だ和やかな春の暖かさ、爽やかな秋の氣が通つてゐるばかりであります。

つひ此程までは、天然の酷烈な暑熱を駕馭して、觀衆の御快適を謀つて居りましたが、今の間に直ぐ、寒氣を征服して皆様の御安逸を講じなければ成らない時が参ります。

昨今こそは自然の好季節とは申しながら、多數の觀衆をお迎へする場屋では、換氣の裝置が充分でなければ、到底御快適の感をお與へすることが出来ません。殊に兎角に流行病の脅威の絶えぬ我邦にありましては、衛生上この設備を肝要といたします。この點に於いて、我が帝國劇場は又諸賢に其萬全を御保證申し上げることの出来るのを喜ぶもので御座います。

◎賣店食堂につき御客様へ御願ひ

念の爲め當劇場内飲食店の種類及び定價を申し上げますと、次の通りでございます。

和食辨當(附)	金 八拾錢	壽司	一人前 金三十五錢
花月(一階北側)		ほかけ(三階南側)	
中央亭(三階)		魚十(南側別館二階)	金十五錢
東洋軒(南側別館一階)		更科そば	金三十五錢
魚十(同二階)		天ぷらそば	
エムプレス(同二階)		更科(三階南側)	金十二錢
洋食 定食(二品、紅茶、パン)	金壹圓	煮	金十五錢
お好み一品	金五拾錢均一	翁庵(三階北側)	
中央亭(三階)		四階和食辨當(椀ナシ)	金五十錢
東洋軒(南側別館一階)		あづまや	金三十五錢
エムプレス(南側別館二階)		四階壽司	
支那食 定食	金壹圓	あづまや	金三十錢
東洋軒(南側別館一階)			

右記の諸店は市内にて既に定評がございますが、若し右記の品々の外すべて内容が値段に比して不當とお考へへの折は、何卒御注意願はしう存じます。其他お氣付の點は御遠慮なく御申し越し下されば幸甚でございます。

尙當劇場内賣店に販賣して居りますお土産物等は、品質も吟味いたしその値段も市價と差のないように注意して定價を附けさせて居りますが、萬一市價より高い物を御發見の場合には當劇場事務所宛に御内報下さるよう御願ひ申し上げます。(失禮ながら右御知らせ下さりました方には薄謝を呈上いたします。)



本山荻舟原作(報知出版部發行)
宇野四郎脚色 鳥居清忠舞臺裝置

一番目 史劇 日蓮上人 二幕

第一幕 北條幕府問注所の一室

一役	人の	一升	藏
一	同	二錦	四郎
一	同	三	十郎
一	同	四助	藏
一	同	五品	作
一	同	六金	五郎
一	下	人昇	藏
一	同	彌三	郎
一	同	小三	郎
一	同	錦一	郎
一	平ノ	左衛門尉	勘
一	日	蓮幸	四郎

本山荻舟原作 (報知出版部發行)
宇野四郎脚色 鳥居清忠舞臺裝置

一番目 日蓮上人 二幕

「第一幕」北條幕府問注所の一室、係の役人達が著座したまゝ、大分長い間執事平の左衛門尉の出座を待つてゐるらしく、退屈凌ぎに天下を戦がせた、日蓮を罵倒し合つてゐる。それは極樂寺の長老良觀の訴訟によつて日蓮のお調べがある文永八年八月の或る日のことである。奥では左衛門尉と良觀の使僧と打合せをしてゐるらしく、別間には定刻から控へてゐる日蓮が苛立つてゐるらしい。やがて左衛門尉は出座した。日蓮も呼び出された。「日蓮とは其方か」と左衛門が問ふと「日本第一の法華經行者佛の使者日蓮でござる」と彼には法華經以外問注所も執事の權威も何物もない。佛法の本意は王法を扶けて國家を守護し一切衆生を救ふに在つて、王法はまたその佛法を扶けて邪法を斥け正法を護るにあり、然も念佛無間、眞言亡國、律國賊、諸宗無得道、法華一人成佛と謂ふを天下は邪見の諸宗を庇ひ釋尊正意の法華經を蔑にするに依つて、王法衰へ日月

光を失はんとしてゐる、故に生温い教化では間に合はず、破拆の途即ち佛敵を亡ばさねばならぬ、即ち「時峻しくして法鬚る杖を持すべし戒を持する事勿れ」とは經文の主意であるといふところ、日蓮は裁きを受けると云ふよりは徹底的に自説を主張してゐるのである。従つて左衛門尉の問ひも、良觀が鎌倉殿の命の雨乞修法を日蓮が妨げたと云ふ事も、建長寺を初め諸大寺を焼き拂ひ良觀等を梟刑にせよと説き廻つた事も、出家の身でありながら兵器を貯へたことも、故最明寺入道や極樂寺入道を以て無間地獄に墜ちたと云ひ觸れて歩いたと云ふ事も、日蓮から云はせれば、法華經を妨げる者は惡魔外道より重罪の佛敵であり、それ等を呪ふのは佛法、王法の上の正義であつた。従つて幕府に於て佛法の正邪を決せず日蓮を刑に行ふ様なことがあつたなら、天下を亂すことになり即ち幕府自らの法律に相違した政道であつて、刑後必ず自略叛逆難とて北條一門同士打あり、他國侵逼難とて外敵の攻撃がある故後侮あるなと述べ立てる日蓮の火の様な熱舌、左衛門尉は憎々しげに日蓮を睨みつけて立ち上つた。さうして罪科は追つて沙汰する事になつて今日のお裁きは打ち切られた。日蓮は泰然自若として去つて行く。幕。

武士 柏藏 四條の臣
 麗之助 松五郎
 友十郎 喜昇
 宗匠 兵士
 次郎 澤右衛門
 新四郎 小三郎
 武之助 錦一郎
 松藏 彌三郎
 國之助 喜由
 宗六 石垣
 扇平 羽藏
 麗平 軍兵
 菱藏 喜藏
 喬之助 三津之助
 武藏 栗香
 答吉 香次
 梅鉢 錦次郎
 紅五郎 瀧次
 錦八郎 田吾作
 錦車 紀雄



第二幕 長谷觀音山麓四條金吾宅
 同返し 相州片瀨龍の口刑場

一金吾妻有明梅幸	一金吾妹千種榮三郎	一平賀右近田之助	一下賀右近女門助	一侍 澁門之助	一四條金吾頼基宗十五郎	一從面之武士 其宗十五郎	一覆面之武士 守字十郎	一同 連守十郎	一同 梅連十郎	一同 高梅十郎	一同 頼定 勘十郎	一同 頼固 高松十郎	一同 山城 民部松助	一同 熊王 丸金太郎	一金山十郎 太介十郎	一依智三郎 直重 幸十郎	一警護の侍 嘉四郎	一同 菊四郎
----------	-----------	----------	----------	---------	-------------	--------------	-------------	---------	---------	---------	-----------	------------	------------	------------	------------	--------------	-----------	--------

「第二幕、第一場」鎌倉、長谷觀音山麓、四條金吾宅、同じ年の九月十二日、丁度金吾の妻有明は夕の誦經を了へ、夫の妹千種と共に、朝から問注所へ呼出されてゐる金吾の身の上を案じ乍ら、日蓮上人は死罪、弟子檀家も重罪らしいとの噂を氣にし、題目を唱へて無事を祈り、有明は夕餉の支度にと奥へ入る。千種は裏木戸で自分の名を呼ぶ人影にハツとした。平賀右近、千種とは許嫁の仲であるに、金吾が不在と聞いて何となく餘所しさに、千種が涙ぐめば、弓矢にかけて千種を捨てぬと云ふ口で、旅の支度もあるからと浮ぬ顔をして歸つて終ふ。その男の無情さに千種は獨り泣いてゐる。月満を抱いた有明の姿が下女の運ぶ燈臺にクツキリと浮ぶ頃、庭にも月が冴えて來た。啜り泣く聲、有明は千種を見咎める、と突然火のつく様に月満が泣き出し、突風に佛壇の曼茶羅が煽る。若しや上人のお身の上にも姉義妹は不亂にお題目を唱へてゐる。金吾の弟頼定、頼固も出て來る。家路を急ぐ四條金吾にバラツと覆面の武士が取圍む。急を知らせた従者は痛手に倒れる。頼定、頼固、有明の助太刀に敵は散つた。従者の死を悲み乍らも一同は各自の無事を佛の加護と益々道心を固めた。一同が夕餉に立つた後へ山城民部が主君の内意を受けて來た。領

地没收の上蟄居、然も日蓮を裏切ると云ふ誓文を書けばそれ許すと聞いた金吾は、雨乞の修法で日蓮に打負かされた腹癪に、法華經を譏訴した外道の良觀の爲に正道の法華經を裏切れば、自分許りか主君まで無間地獄に墜ちる故忠の爲にも法華經に殉すると、飽迄誓文を拒むので、民部は苛立つ。有明は夫の心を勵ます。民部の刃は光る、頼定は彼を確乎と抱き締めた。民部は荒々しく座を立つた。幕府を怖れて平賀入道から法華經信者の千種と右近の婚約破談の書状が來る。千種の唯法華經を命とすると言葉に、遠の一同も垂頂れた。息咳切つて日蓮の僕熊王丸が飛んで來る。日蓮上人が召捕になり龍の口の刑場に引かれたと聞いて、題目を唱へ乍ら金吾は弟等と一散に刑場へと走つた。

「第二場」相州片瀨、龍の口刑場。今しも金山十郎等の警戒裡に馬上悠揚と日蓮が來ると、金吾兄弟に熊王は警護の兵を突のけ日蓮に絶つて涙にくれる。法華經最初の殉教者たる事に無上の法悦を感じてゐる日蓮は、日蓮に殉死しやうとする金吾兄弟に懇々と日蓮なき法華經を託して、依智直重の刃の下で題目を誦へる。その聲に直重はどうしても刃を下せない。突如、雷光、刀は折れた。その奇蹟に心を打たれた直重は日蓮を相模の依智へ導いて行く。幕。



岡本綺堂作
鳥居清忠舞臺裝置
演藝畫報所載

二番目

世話劇 小梅と由兵衛

二幕

- 第一幕 大阪聚樂町裏長家
- 一 長家女房おかね 國之丞
 - 一 同娘おきく 純之助
 - 一 合長家の男の子 宗之助
 - 一 同小娘 雄之助
 - 一 由兵衛女房小梅 梅幸
 - 一 賣卜者良齋 勘平
 - 一 茶屋娘おしゆん 源四郎
 - 一 梅澁の由兵衛 幸次郎
 - 一 天王寺屋丁稚長吉 泰次郎
 - 一 齋坊主西住 松助
 - 一 天王寺屋 宗十郎
 - 一 手代三次郎 宗十郎

岡本綺堂作 演劇畫報所載 鳥居清忠舞臺裝置

二番目 小梅と由兵衛 二幕

「第一幕」元祿二年初冬の夕暮。大阪、聚樂町の裏長家、梅澁の由兵衛の住居である。一つ長家の西住が叩く念佛の鉦も薄ら寒い。井戸端會議が済んでお神さん連が各々引上げるのを見澄して、細帯に筒袖姿の由兵衛の妻小梅が井戸端へ出て洗物を終へ、葱葉片手に歸つて来た隣家の辻占ひ良齋と、互に不景氣を託しながら臺所口へ消える。ところへ野中の觀音前の茶見世女おしゆんが、小梅の弟で天王寺屋の手代三次郎を訪ねに来たのを小梅は邪慳に追ひ出す。その物音に由兵衛は不恰好に女の着物を着て、奥から出て来る。小梅は姉思ひの三次郎が近頃おしゆんと云ふ色の出来てから小遣一文送つて来ないと、おしゆんを罵倒して、夫婦は寒さ凌ぎにと酒を酌み交す。淋しい念佛の鉦の音に誘はれて夫婦は遂に悪事を盡した身上話を愚痴交りに語り合ふうちに、酔ひが廻つて夫婦喧嘩を始め、仲へ入つた隣りの良齋が占ひ者なのを幸ひ夫婦は運を見て貰ふと、夫婦が夫婦共今夜中に大金が入るとの相、良齋が歸つた後で夫婦

はい、氣持で前祝ひを始め、「御免なさい」と聞き馴れぬ男の聲、流石の夫婦も人前を憚つた。三次郎を捜しに来たお店の丁稚長吉である。然も三次郎は小梅の所へ行くと云つて長吉、に百兩持たせ高津のお社に待たせておきおしゆんと會つてゐるらしい。「今夜中に大金が入る」思はず夫婦は顔を見合せ、胸に一物ある小梅は三次郎が酔ひ潰れてゐるから今連れて来ると由兵衛に胸を叩き、長吉を殺して奥へ去る。西住が小梅までお勤めがあるからと留守を頼んで行く。小梅は三次郎が頭痛で起てないからと長吉を奥へ遣り、表に氣をくばる。金財布を手に由兵衛は奥から出て来た。長吉は絞め殺されて終つたのである。行燈の火に夫婦は貪る様に小判を数へてゐると、三次郎の聲に慌て、小判を隠す。三次郎は長吉を尋ねに来た。長吉の草履、小梅は長家の子供のたと云ひ紛らして隠す。行燈の下に一枚光る小判、三次郎の顔色は變つた。小梅は氣取られまいと姉の權威を振り廻して無理に追ひ遣る。不安を感じた夫婦は長吉の死骸を葛籠に入れて先刻西住が行くと云つた小梅へ捨て様と由兵衛は家を出る、途端に良齋と顔を見合せ由兵衛はハツとし、質屋へ行く、途端に良齋と顔を見合せ由兵衛は戸の後から三次郎は疑乎と見送つてゐた。幕。



大喜利

時代劇 廿四孝狐火

結城孫三郎操り應用
人形振りにて相勤申候

奥庭の場

一息女八重垣姫 宗十郎
一人形 遣高助
一同 田之助
一同 源平
一後 見宇十郎
淨瑠璃 竹本重壽太夫
同 竹本富士太夫
三味線 重澤重太郎
同 鶴澤才三郎
長唄 音樂師社中
振附 藤間勘右衛門

長 中村六三郎
長 中村六次郎
長 中村六次郎
長 中村六次郎
長 中村六次郎
長 中村六次郎

三味線 三味線
三味線 三味線
三味線 三味線
三味線 三味線
三味線 三味線
三味線 三味線

同 望月太喜四郎
同 中竹美
同 中佐十郎
同 中佐十郎
同 中佐十郎
同 中佐十郎

長 長 鼓 長
長 長 鼓 長
長 長 鼓 長
長 長 鼓 長
長 長 鼓 長
長 長 鼓 長

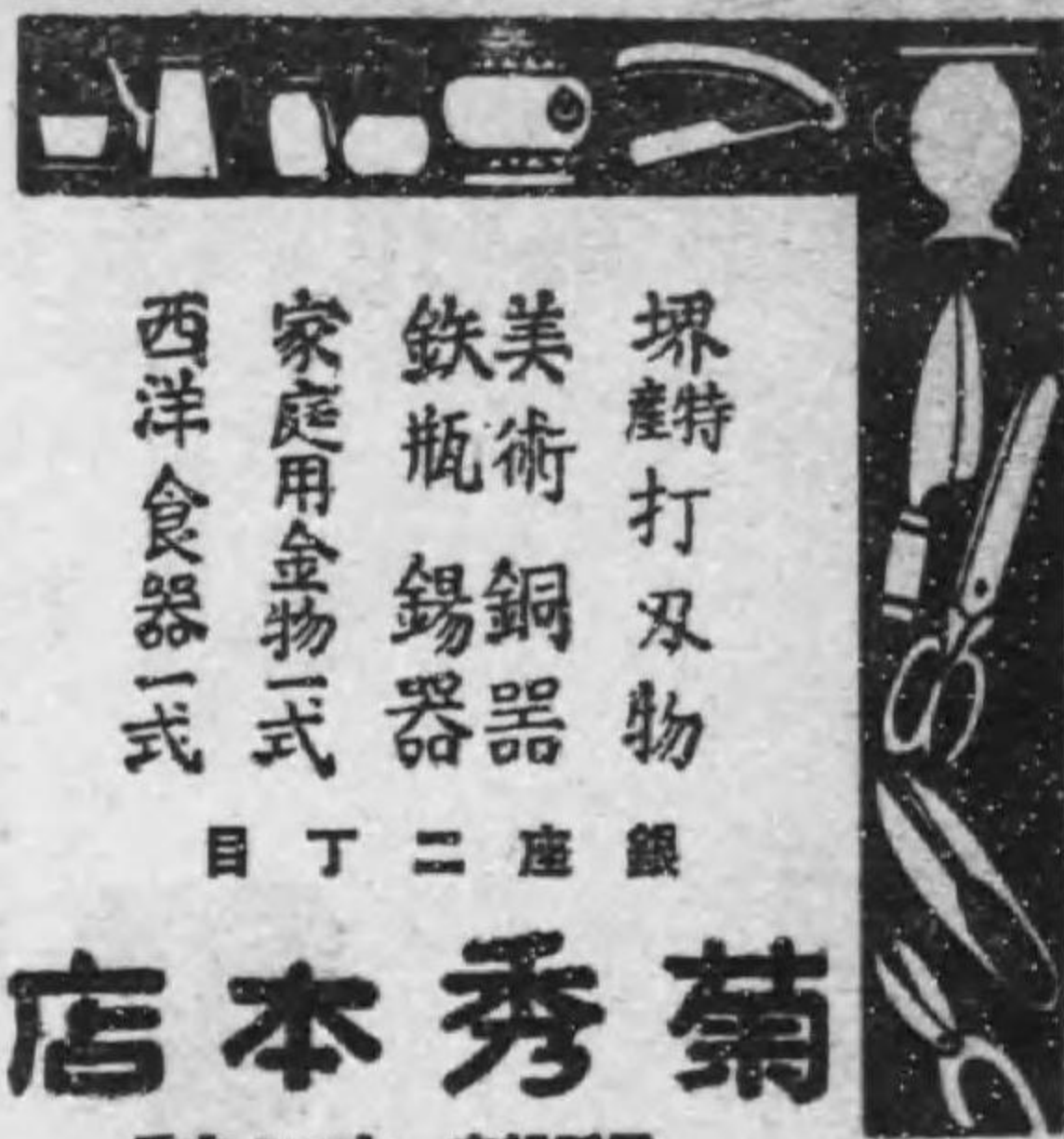
大喜利廿四孝狐火 一幕

結城孫三郎操り應用。人形振にて相勤め候

足利十二代源義晴の所謂戦国時代である。甲斐の國主武田晴信は隣國のよしみで家寶諏訪法性の兜を越後の長尾謙信に貸したところが、なか〜それを返さないで遂に鋒先を争ふ様になつた。幕府では君命に從はずとあつて早速武田、長尾を呼び付ける。義晴の北の方たをやめ御前は王照君の例にならひ、晴信の子勝頼と謙信の娘八重垣姫との縁組に依つて兩家の和睦を計つた。その後將軍義晴は鐵砲を献上するを稱して井上新左衛門の爲に打殺された。嫌疑は兩人にかゝつた。晴信と謙信は三年のうちに犯人が出なければ各々その一子勝頼、景勝の首を切る約束をした。三年は経つた。幕府の名代村上左衛門が勝頼の首を受取りに武田家に来た。晴信の奥方常盤井は板垣民部が勝頼の身替を連れて來ると云ふ言葉に、村上に暫時の猶豫を願ふたが、間に合はずに勝頼は切腹した。その後民部は身替として義作を連れて來た。然も晴信はその民部を斬つた。さうして晴信の口から常盤井は初めて、自分の子と民部の子とは瓜二つの所から生れながら、民部に拘替へられ、眞の勝頼は農家の里子義作となり、從つて切腹した勝頼こそ民部の子である、眞の勝頼は元濡衣に諏訪法性の兜を取戻す様に頼んで死んだ。眞の勝頼は將軍を殺した犯人を出すまでは他迄義作であることにした。濡衣は長尾方に入り込み八重垣姫の乳母となつた。一方長尾謙信は一子景勝の首も切らず剩〜義晴の

北の方や遺子を館へ招くさ聞いた義作の勝頼は菊作りとなつて長尾方へ紛れ込んだが、濡衣の父で花守の關兵衛の爲に勝頼と見出され謙信に注進される。腹に一物ある謙信は義作を士分にして抱へる。さて八重垣姫は許嫁の勝頼が切腹したと聞いてからは、一間に引籠り死んだ勝頼即ち民部の子の繪姿に思ひ焦れてゐるさ、別間で濡衣と密談中の義作即ち勝頼の姿を透見してから、繪姿に生寫の義作が忘れられず、濡衣を説き伏せて義作に會はせて貰ふと、義作は諏訪法性の兜を奪ひ取つてくれたらと云ふのを謙信に立ち聞きされて終ひ、謙信は義作を隠居へ急使に立て、その途中で亡き者にしようとする。八重垣姫はそれと知つて一度は父謙信の無情を歎いたが、氣を取り直し、追手の者に先廻りして勝頼に急を知らせるには、近道の諏訪湖を渡らなければならぬが湖は氷が張つて船の往來も出來ず、歩路では女の足、翔が欲しい、羽が欲しいと悶え、もう此上頼むは神佛と、床に祭つてある法性の兜を手にかける途端、水にうつる白狐の姿、ハツと兜を遠のければ元の姿、さては諏訪明神の加護かと兜を戴けば、忽ち狐火が起り、不思議や八重垣姫は白狐となり諏訪の湖を飛んで行く。幕。

安心して買物の特選専門店



特打及物
美術銅器
鉄瓶 錫器
家庭用金物式
西洋食器一式

銀座二丁目

菊秀本店

電話座番六八二七

御觀劇は是非帝劇へ

蓄音器の
御用命は當店へ

麹町區三番町五十一
靖國神社ソキ

歌舞伎堂

電話四谷五六九五

中央亭酒場
料理和洋
中央亭酒場

料理和洋
中央亭酒場



純粋廣東料理

李丘

築地水行社前
電銀六七二六番

御觀劇のお歸りに

大島つむぎ
さつま餅
召しませ
カブ平産ウツロ通
山口商店
電銀七九九

觀覽料

(觀覽税金共)

◎一、二階席(白券)御一名 金六圓五十錢

◎一、二階席(青券)御一名 金五圓

◎三階席 御一名 金一圓五十錢

外一切御不要

大正十四年十月一日より

帝國劇場

毎夕午後四時半開演

電話

六六六六
〇〇〇〇
八八八八
三二一〇
六六六六
一七七七
三二一〇

大正十四年九月三十日印刷
大正十四年十月四日發行

【定價金貳拾錢】

編輯兼發行人 上野芳太郎

印刷人 中野鉄太郎

印刷所 東京市芝區愛宕町三丁目二番地 東洋印刷株式會社

すまり居てし致賣販てに店賣兩屋方上・吹矢及口入各内場は「劇帝」誌雜

劇帝

レイトショー

每興行第二日目
帝劇名物レイトデーは、毎興行第二日目に開催いたします。なほ詳細はその都度新聞広告でお知らせ申し上げます。

おみやげ進呈

当日はおみやげとして白席青席の御観客へはレイト化粧季節向き詰合せ箱を、その他のお観客へはフード石鹸を進呈いたします。料金は平日通りです。

大阪道頓堀中座でも毎興行第二日目にレイトデーを催し、おみやげを呈いたします。

け附着お と粧化お と髪お の行流

—園粧美本松—

子いあ本松

—十町村宮布麻—

—九〇六二山青話電—

行發回一月毎定「劇帝」誌雜 ○々 眞津 寫味 ○興 内載 案滿 行談 興劇



すまり居てし致賣販てに店賣兩屋方上・吹矢及口入各内場は「劇帝」誌雜

ドーマポトール

最新式
煉香油

つけ心地かるく
香氣高く床しく

心頭おのづから
爽快!



販大・京東
店商平贊尾平

行發同一月毎定「劇帝」誌雜 ○々 浪津 寫味 ○興 内載 案滿 行談 興劇



ほんのり
色白くなる

夏は
日ヤケ止メ

家一瓶一

父のヒゲそり後に
母のカクシ化粧に
姉のお化粧下地に
妹の通學整容料に

東京・大阪 平尾贊平商店

すまり居てし致賣販てに店賣兩屋方上・吹矢及口入各内場は「劇帝」誌雜

レリナトール

一品で
一分で

刷毛も下地もなしに
肌を養ひ、新味豊か
な白さとなる

二重美粧作用！

時代は進む

煉白粉の時代から
メリーの時代へ...



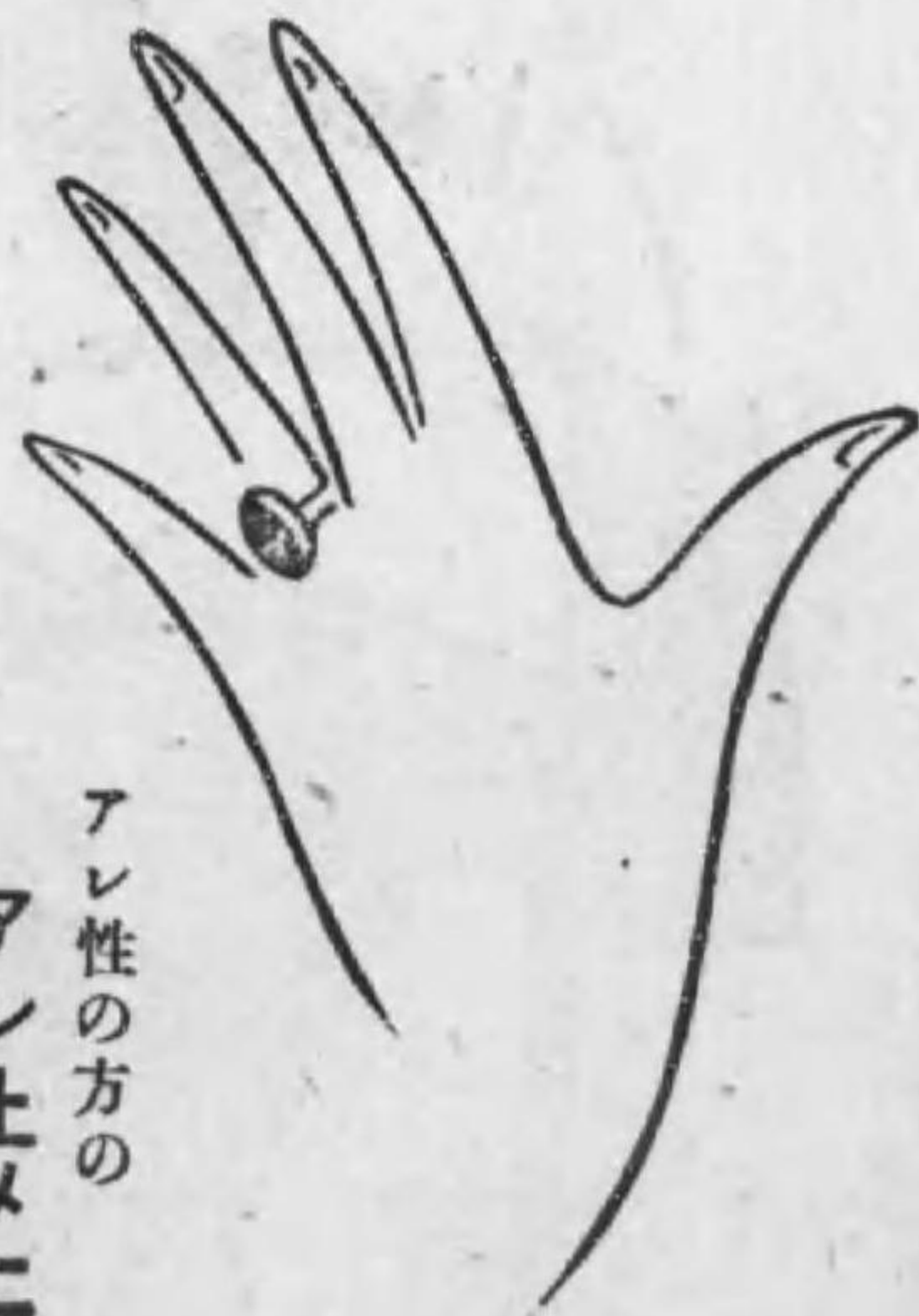
行發回一月毎定「劇帝」誌雜 ○々 眞津 寫味 ○興 内載 案滿 行談 興劇

クレームトール

若々しくする美膚料

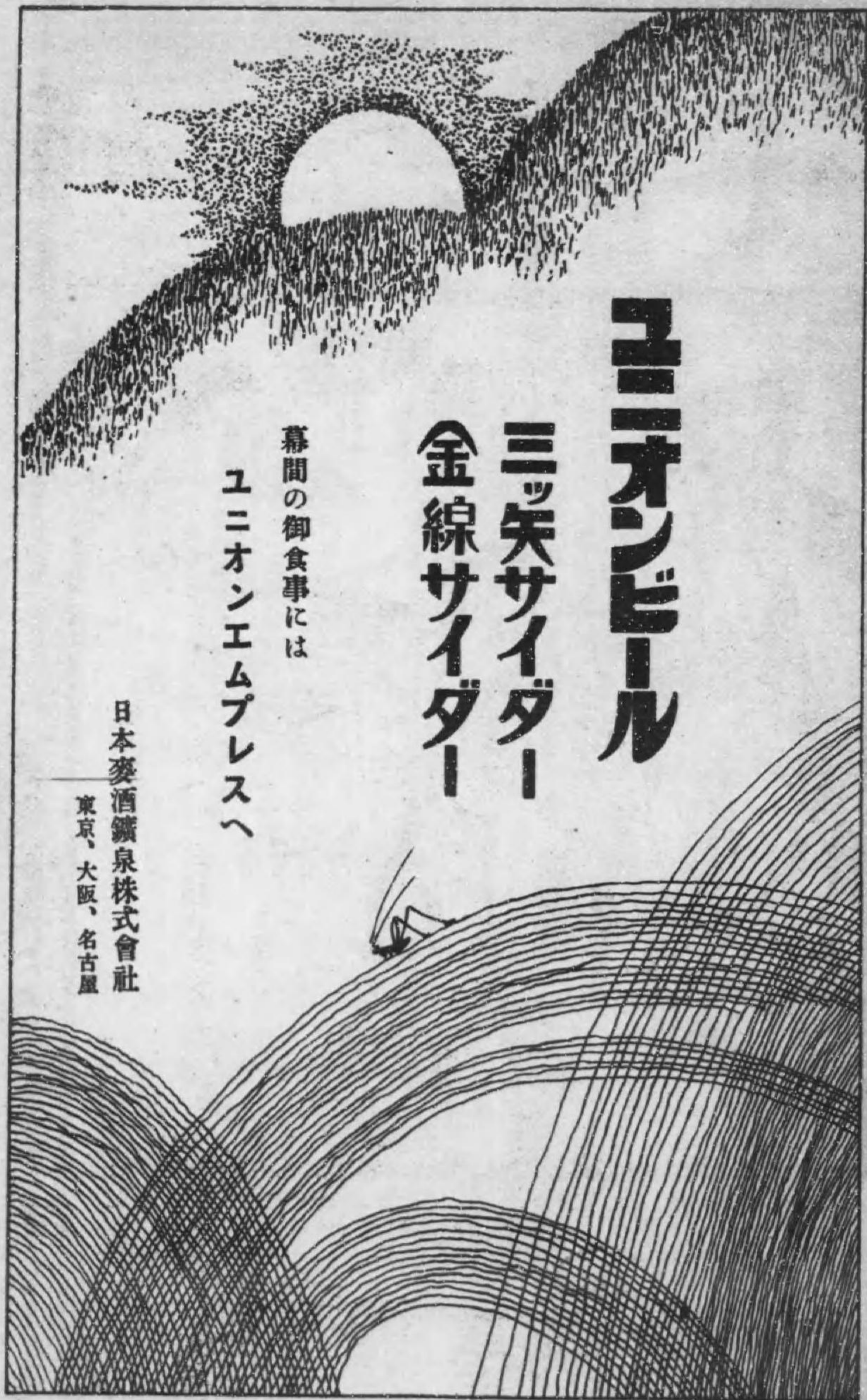
たしかに
五つは若
返ります

本品をかゝさず御愛用
になれ、お顔はいつ
も若く、いつも美しい

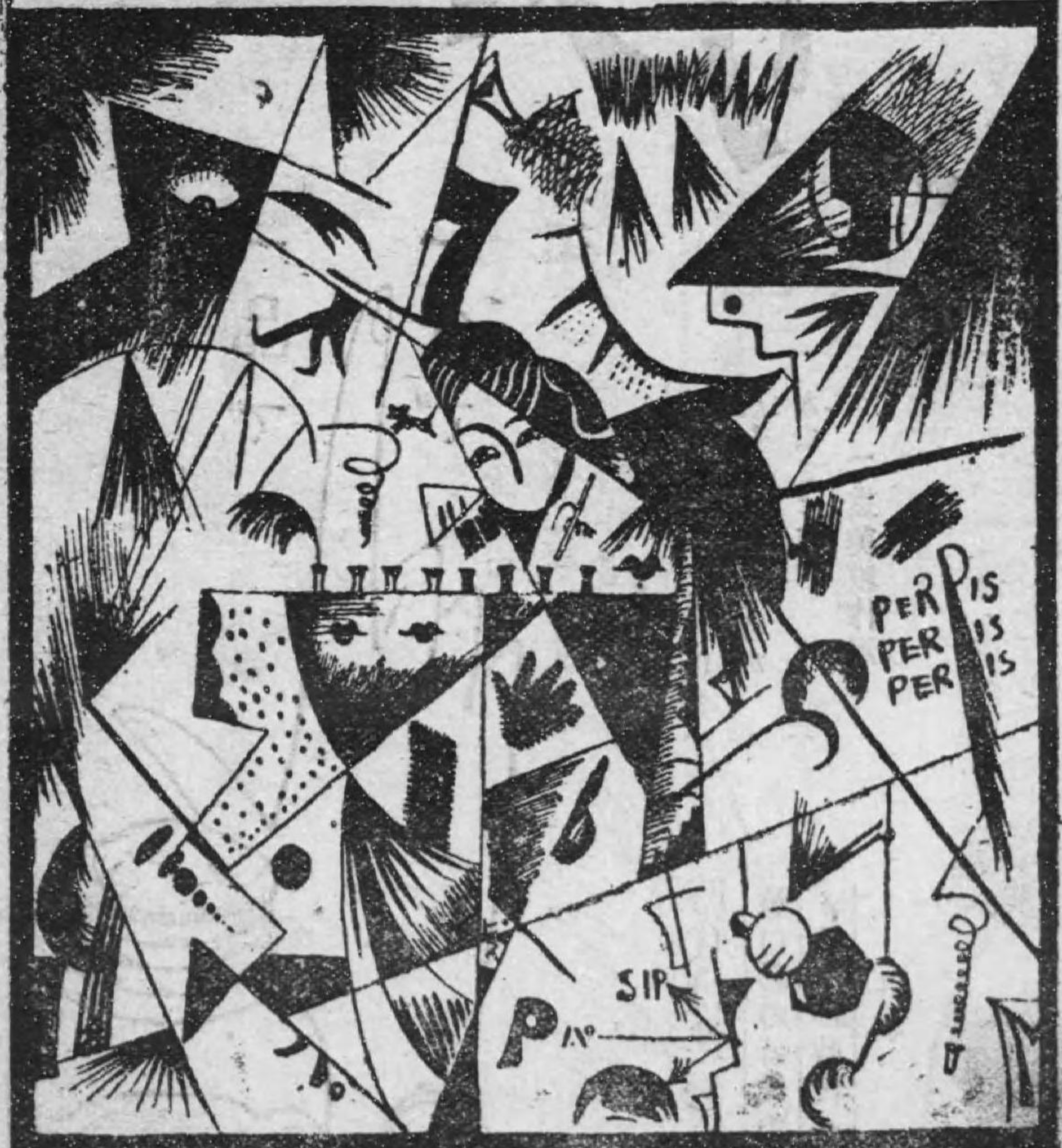


アレ性の方の
アレ止めに
脂肪性の方の
脂おさへに

店 岡 平 發 尾 平



強 飲 料
スピーパ



未 來 派 的 告 白 No. 2

クラゲートン

大 阪 東 京
 乾 飲 食 料 品 株 式 會 社
 發 賣 元

終



組浦杉扱取手一告廣 書筋本繪 (場劇國帝) ムラダロフ (場舞演橋新)